

平成の革命家

(1) 元東京入国管理局長が革命家になった

2012年10月21日の『ジャパントイムズ』の「移民が日本を救う」というタイトルの記事において、坂中英徳著『日本型移民国家への道』を読んだ米国人ジャーナリストが、日本の移民革命を先導する坂中英徳を、「革命家の顔：元法務官僚、元東京入国管理局長」と世界に報道した。在日歴30年の外国人が書いたこの記事は、日本事情に詳しい世第界の知識人に衝撃を与えたと聞いている。

ミスター入管の異名を持つ元法務官僚がなぜ革命家と命名されたのか。保守の典型の私が革命家と呼ばれたのは晴天の霹靂であるが、おそらく人口危機の日本を救う大役を任せられる日本人は坂中英徳しかいなかったということなのだろう。時代の要請と研究テーマがたまたま重なり、そのような重責を担う立場になったということである。

35年の入管時代、日本最強のタブーである移民鎖国問題と向き合い、移民政策の立案がライフワークとなった元東京入国管理局長が、急進的な移民革命理論を武器として、人口秩序の崩壊＝日本民族の消滅をくいとめるために立ち上がった。退官後は、民間の研究機関、移民政策研究所を拠点に移民政策研究に命がけで取り組んだ。

移民政策のパイオニアの道を歩んだのは、古典的論文『今後の出入国管理行政のあり方について』を40年前に書いたからだ。その時から移民国家のあるべき姿の究明に全力をあげてきた。そして近時、長年の実績が認められた。たとえば、世界のジャーナリストの間で坂中英徳はミスターイミグレーションの名で呼ばれている。

職業人生を振り返ると、一途な気持ちで移民国家の理想像を求めてきたが、特別の才能があったわけでも人並み外れた努力をしたわけでもない。どこにでもいる普通の元行政官に過ぎないが、あたかも天から白羽の矢が立ったかのように、移民革命の急先鋒の役が回ってきた。その時、日本の未来を創る決定的瞬間とめぐり合った天運に身を任せて、日本史上最大にして最高の革命を貫徹しようと決意した。天命であるから天職に殉ずるしかないと割り切って迷いが消えた。長い人生には人知の及ばぬ神秘的な場面を経験することがあるのだと思うと感涙をぬぐいきれない。

ところで、官僚の末席を汚したことがある私は、官僚組織が移民革命に対する抵抗勢力になれば、坂中移民国家構想は実現しないことを熟知している。そこで2015年の夏、霞ヶ関の中枢幹部たちと会って、今後の移民政策のすすめ方について腹を割って話をした。彼らは「先輩の日本型移民国家構想に賛成です。それしか日本再生の道はありません」と語った。そのとき、元法務官僚が立てた移民政策が、霞ヶ関のエリート官僚たちの心をとらえたと確信した。

内閣官房の一部の官僚たちが坂中構想を支持する立場に立った。霞ヶ関の異端児であった革命家のまわりに政府高官たちが集まってきた。彼らは敵に回すと怖い存在だが、味方につければ最強の実動部隊になる。霞ヶ関の後輩たちが、私の志を引き継いでくれるという希望がわいてきた。

(2) 移民革命のオピニオンリーダー

私が提唱する移民国家ビジョンに関し、次のような感想が寄せられている。「千年来の移民鎖国からの歴史的転換」(日本文明史家)。「明治維新以上の革命」(外国人問題の研究者)。「憲法改正以上の難事業」(都議会議員)。「壮大なユートピア計画」(全国紙の記者)。「移民革命の先導者」(米国人ジャーナリスト)。「日本の救世主」(英国人ジャーナリスト)。「世界の救世主」(在日パキスタン人)。「ミスターイミグレーション」(日本外国特派員協会幹部)。

日本の歴史を概観すると、日本人は改革を重ねて生き延びるのは得意だが、根本的変革や革命を好まない民族ではないかと思うことがある。

日本の歴史上、「大化の改新」と「明治維新」はれっきとした新国家の建設であったが、なぜか日本人はそれを「改新」「維新」と呼んで「革命」とはいわない。日本人は国の断絶を嫌い、国の連続性を尊ぶ民族なのだろう。わたしは、日本人が綿々と守ってきた国柄、すなわち国民の安寧を第一とする国のあり方を誇りに思うことでは人後に落ちない。日本人は本物の革命をやらなかったかもしれないが、先人の英知と努力のおかげで、日本文明は地球文明のなかで確固たる地位を占めている。

ところが今日の日本は、世界の歴史にもほとんど例を見ない人口秩序の崩壊という国家的危機にある。私は国家公務員生活の最後の年(2005年)、日本文化の担い手が消えてゆく日本開びやく以来の危機に立ち向かうにあたって、中途半端な改革をいくらやっても日本民族の永続の可能性は薄いと判断した。そのとき、日本の歴史に例のない危機には日本の歴史上初めての日本革命で応じなければならないとひらめいた。同時に、移民革命の先達として、「千年に一度の人口危機には千年に一度の移民革命で対処しなければならない」と心に誓った。

そしてそのアイデアを、2005年3月発行の『入管戦記』(講談社刊)の第9章「2050年のユートピア」として公に発表した。日本が大きく舵を切って、2000万人の移民を受け入れ、多民族共生社会の理想に向かって一路邁進したという前提で、2050年の日本の姿を描いた。当時、この論文に関心を寄せる日本人は一人もいなかったが、今から思うと、それは決して夢物語ではなく、日本の生き残りをかけた空前の大構想であつたいえる。

その時から現在まで、執筆活動、講演活動などを通して移民革命のオピニオンリーダーの役をつとめている。国内の一握りの反移民分子から売国奴呼ばわりされているが、世界の知識人の中には「救世主」と評価するむきもある。自分では憂国の思いが強い熱血漢だと思っている。

日本史上最大規模の移民を入れる移民革命は劇薬だ。だが、それはいわば日本民族の自然死の進行をとめる万能薬である。移民を入れると直ちにききめが現れる即効薬でもある。究極の目標は日本文明のルネサンスだ。世界文明にとってかけがえのない存在の日本文明が永遠に存続することだ。

われわれの祖先は不屈の精神で幾度もの民族的危機を乗り越えてきた。人口ピラミッドの崩壊が引き起こした日本民族の消滅危機も、日本人は民族の底力で克服するだろう。のみならず、移民国家ジャパンは人類共同体の理念を掲げ、世界の少年少女たちが移住したいと憧れるユートピア社会の実現に積極的に取り組むだろう。

(3) 移民革命の主演——20代の若者

日本は少子化と高齢化が同時進行する人口氷河期に入った。出生率の劇的な回復は、当分の間、望めない。政府の出生率の長期見通しも、2010年から2060年まで、1・35あたりの低水準が続くと予測している。

成熟した文明社会の日本では、仮に出生率が高まり、出生者人口が増加に転ずる日が訪れるとしても、年少人口が異常に少ないので、人口ピラミッドが正常な形に戻るまでには少なくとも三世代を要すると覚悟しなければならない。そのうえで、われわれは子供が街からいなくなる祖国のために何ができるかを真剣に考える必要がある。人口崩壊の脅威に立ち向かう気概のない民族に明日はない。

ここから話は本題に入る。国民が新国家の建設に主体的にかかわることなく、たとえば、窮地に追い込まれてやむなく、若しくは国際社会の圧力に屈してしづしづ、移民国家へ移行する場合の日本はどうかを考えてみたい。結論を先にいえば、現世の日本人にも後世の日本人にも大きな悔いが残る。それでは国民が燃えるような精神の高揚を感じることもない。歴史的な仕事に参加した達成感も得られない。新しい国づくりに必要なエネルギーも生まれない。

移民国家の創立という千年に一度の大舞台で主演を演ずるのは国民だ。なかんずく20代の日本人が主導的な役割を果たしてほしい。若い世代が先頭に立って歴史的な第一歩を踏み出し、多民族共生国家の創建に挑むのだ。人類永遠の課題と取り組めば、日本の若者は身近な人への思いやりの心と人類愛をかねそなえた地球人へと成長するだろう。

移民国家に生まれ変わることの歴史的必然性について世代をこえて徹底的に議論し、新国家の創建に全員が参加し、人類共同体社会を創るビッグチャンスを自分のものにしてほしい。

さて、私が唱える「日本型移民国家への道」は理想論あるいは壮大なユートピア計画といわれるが、その批判は当たっている。問題は、それが直面する人口減少問題を解決する方法として普遍的妥当性を持ち、かつ多くの国民の共感が得られるかである。

私は人口崩壊が加速する将来に不安を募らせる国民に夢と希望を届けたい一心で移民国家構想を提案している。火山の噴火など天変地異が相次いだ2015年の夏。国民が日本列島の将来に対する漠然とした不安を感じるなかで、私の情熱をこめた移民国家論が若者の心を奪ったと思われる出来事が立て続けに起きた。

一つ例を挙げると、20代の日本人の50%が移民の受け入れに賛成という世論調査(2015年8月26日の読売新聞)に代表されるように、若い世代を中心に移民に開かれた心を持つ日本人が激増した。時代は移民国家の創成＝日本のビッグバンに向かってダイナミックに動いた。国民が移民と共に生きることに心から喜びを感じる共生社会の樹立も夢ではないと自信を持った。

日本国民の教養レベルは世界の最高水準にあると言っても過言ではない。わたしはこれまで、八百よりの神々を信仰する日本人は、世界のどの民族よりも開かれた心で移民を迎える素養があると言い続けてきた。

私の夢をひとついわせてもらえば、百年後の日本人は、子々孫々の若い世代の身を削る努力が実り、世界の先頭を切って多民族共同体社会を築いている。

(4) 絶体絶命のピンチは飛躍発展のチャンス

人口統計学的推計で日本の未来が明らかになる。最近の人口統計は、地球文明の一翼を担う日本文明が地球上から消えてゆく絶望の未来を指し示している。

私はかねてより「日本の一大事は移民国家へ転換する絶好の機会」と国民に訴えている。日本の絶体絶命のピンチを日本の飛躍発展のチャンスに変える逆転の発想に基づき、愛国の心がある日本人が一丸となって理想の移民国家を樹立してほしい。

私は移民政策一本の35年の行政経験を生かし、移民法の制定、移民受け入れ基本計画の策定、入管法の改正などの移民法制のあり方を含む、直ちに移民国家への移行可能な具体策を提案している。人口秩序の崩壊という緊急事態に対処するための実践的移民政策だと自負している。だが、大方の国民の支持が得られたのかというと、実は、そこまでは至っていない。

ただ、私の努力が功を奏して、10年前の移民賛成ゼロから今日の移民賛成51%(2015年4月の朝日新聞の世論調査)まで世論が動いた。あと一步のところまで来たと思うが、まだ乗り越えるべきハードルは高いと感じる。目だった移民反対論がないのは救いだが、総じて国民は移民受け入れ問題に無関心である。どうすればこの最後の壁を乗り越え、移民国家への道を確認たるものにすることができるか。

ひとえに移民政策のオピニオンリーダーたる私の力量にかかっている。移民の受け入れについて国民の賛同を得るためさらに努力する。たとえば、移民立国の緊急性、移民法制の具体的内容、移民政策がもたらす経済効果などを国民によく説明する。

ところで、日本の歴史において明治維新のときが「第一の開国」といわれるが、明治時代には外国人はほとんど入っていない。江戸幕府が鎖国政策をとっていたからいかにも開国のようにうつるが、「人の開国」ということではメインは500人ほどの「お雇い外国人」を欧米先進国から招聘しただけだ。奈良時代から続く移民鎖国体制は明治の開国をもってしても微動だにしなかった。

移民1000万人構想は、外国人の受け入れという意味では有史以来の日本開国を旨とするものだ。

1000年以上にわたって同じ文化を共有する者ばかりで暮らしてきた日本人の少なからずが、わけでも65歳以上の高齢者が、風俗習慣の異なる外国人と付き合うのは御免蒙りたいと思っているのではないかと推測する。

私と同世代の日本人の気持ちがわからぬでもないが、高齢の日本人に対して心を鬼にして直言する。「日本人の心の奥にある島国根性をぬぐいさり、異なる民族をもてなしの心で迎え入れ、移民との共生関係を築くしか日本の生き長らえる道はない。国民が移民を温かく迎えれば、移民の助けを借りて社会・経済・財政の存続の道が開かれる。移民の受け入れを拒絶すれば、人口崩壊により国の基本制度は崩壊の危機に瀕する。のみならず、社会保障制度のあり方をめぐって負担者の若者と受益者の高齢者の世代間対立の危険が忍び寄ってくる」。

(5) 「一千万人の移民」と「四千万人の人口減」

人口崩壊時代の日本の国のあり方として、理念上は、移民に頼らない選択肢も考えられる。「小さいながらも美しい日本への道」である。1990年代後半の入管時代、私はそのような「滅びの美学」にひかれるところがあった。

人口の自然減をそのままの形で受け入れ、少なくなった人口に見合った「ゆとりある日本」を目的とするものである。人口の自然減に従って、9000万人の人口になればそれに適した社会をつくり、4000万人の人口になればそれに適した社会をつくるというものだ。

人口は国家と経済と社会を構成する基本的な要素である。人口の減少が続けば、国勢は衰える。経済は縮小する。社会の多くが消滅する。そのことは承知のうえで、人口の自然減を日本文明が成熟段階に入ったことによる歴史的必然と受け入れ、国民の生き方・生活様式から社会経済制度・産業構造に至るすべてを人口減少社会に適合するものに改めるというものだ。

ここで強調しておきたい。4000万人の人口減に対応する社会の形成は並大抵の努力では達成できない。生活水準を落とす覚悟が国民に求められる。豊かな生活に慣れ親しんだ国民にとって清貧生活は耐え難いものになるであろう。

万が一移民ぎらいの国民が多数を占め、政治が「美しい衰退の道」を選択するということになれば、1000万人の移民の協力を得て新国家の建設をみざす私が出る幕はない。あまりにも絶望的な日本人の美意識についていけない老人は去るのみである。

以下は、身を引くときに国民に訴える「檄文」である。「移民を受け入れる覇気がない国民には、人口崩壊時代の苦難を乗り越える意志も、生き方を根本的に改める気力も、おそらく期待できないであろう。移民鎖国を続ける日本は、東日本大震災からの復興がかなわないばかりか、遠からず経済も財政も国民生活も行き詰まる。やがて手つかずで山積みになった問題や、人口危機の深まりが引き起こした世代間の骨肉の争いの激化とともに『醜い衰退の道』をたどることになろう」。

それはさておき、では人口ピラミッドの瓦解をまぬがれる具体的な解決策はあるのだろうか。理論上は、直ちに革命的な移民政策を実行に移して世界から有為の人材を大規模に入れること、同時に人口が長期的に安定するとされる2・07の出生率を国家目標に定め、出生率の向上に資するあらゆる政策を動員することが考えられる。

ただし、それを直ちに実行に移したとしても、出生者人口が増加基調になるまでには長い時間がかかり、かつ1000万人の移民を入れても3000万人の人口減はとめられないので、社会革命と政治制度改革を行って人口減少社会の身の丈にあった国家制度を確立することが、日本の全壊を免れる必須条件である。

(6) 移民革命と情報革命

遅ればせながらパソコンが使えるようになり、一般社団法人移民政策研究所のホームページとフェイスブックでほぼ毎日、精力的に移民政策を語っている。2013年4月から2016年1月、ホームページの坂中ブログとフェイスブックの投稿欄に短文(700字前後)を載せている。その数は優に1000本を超える。どれもが力をこめて書いた力作である。それが移民政策の推進に威力を発揮した。2014年以降、移民政策に賛同する若者が急激に増えている。国内のみならず世界の若者にも影響が及んだと思われる。

フェイスブック上では、私の問題提起を受けて移民賛成派の人たちの間で建設的な移民国家議論が行われている。コンピュータのネットワークを介して移民政策研究所の坂中英徳所長の移民革命論が日本中に広まり、ネット上では「移民」「移民政策」「移民革命」「移民1000万人構想」などの言葉が広く使われている。インターネットの世界において移民革命目前の雰囲気は漂っている。新しい国づくりにコンピュータの情報発信力を最大限活用する必要があると思いついた。

一例を挙げる。2014年7月の移民政策研究所のホームページへの一日あたりのアクセス数が1万1000件にはね上がった。この驚異的な数字は若い人たちの多くが移民政策に関心を寄せていることを如実に示すものだ。さらに、2015年8月の読売新聞の「人口減社会に関する全国世論調査」によると、20代の日本人の50%が移民の受け入れに賛成と答えている。若い世代は坂中ブログを読んで移民問題を勉強し、移民受け入れの必要性を理解したにちがいない。

わたしは日本の若者を誇りに思う。精神の許容性の広さでは世界のトップクラスに入るのではないか。心の広い若者たちが中心的な役割を果たす移民国家ニッポンの将来は輝かしいものになるだろう。

若い人たちが先陣を切って移民受け入れの論戦が始まったのは画期的なことである。新時代の幕開けを飾るのにふさわしい。最新の情報技術を駆使して日本の歴史に新たなページを加えてほしい。「平成時代の20代の日本人が決起して新国家を建設した」「日本の移民革命は情報革命の所産」と、後世の歴史家は平成の移民国家の成立について記述するであろう。

(7) 憂国の士に日本の未来を託す

若い人たちに夢を与える国家目標はあるのだろうか。人口崩壊時代を生きる日本の若者にぴったりの目標がある。世界の若者が移住したいと憧れる移民国家の創立だ。

日本の未来を担う若者が移民と手を携えて人類未踏の多民族共生国家の創建に挑戦するのだ。これ以上に若い世代のチャレンジ精神をかり立てるものはない。またそれは、若い人たちが新しい生き方を模索し発見する道でもある。日本の若者が異なる民族と真摯な態度で向き合えば、寛容のこころを持つ日本人と、希望に燃えて日本に移住してきた移民が意気投合し、友好関係を深める社会が形成されるであろう。

人口ピラミッドが崩壊する時代を生きる10代・20代・30代にとって移民は同士だ。移民と力を合わせて日本の展望を切り拓いてほしい。

最近、私を訪ねてくる大学生、高校生、中学生が増えた。みなさん私の移民革命思想に共鳴して来られる。若い世代の力で世界に開かれた移民国家を創らなければ自分たちの明日はないと語る。日本のあ

るべき姿を真剣に考えている若い人たちの話を聞くと、日本の将来は心配ないとの安堵感がこみ上げてくる。

ここから話は核心に入る。私は2010年7月、急がないと日本が危ないと危機感を覚え、わかものが移民政策について議論を戦わせる「移民国家創成塾」を開設した。これまで月一回のペースで約40回の勉強会を開催し、100人を超える移民政策の専門家を育てた。

移民立国に自分たちの将来をかける若者がひざを突き合わせて議論している。幕末の吉田松陰が講義した松下村塾を彷彿させるものがある。命が尽きるまで移民国家創成塾を主宰し、移民政策の専門家を世に送り出す。

いよいよ坂中移民国家構想の運命の決まる日が近づいてきた。日本百年の計の移民国家大計をうち立てた。最近、移民政策を支持する若者が急激にふえている。最後に残された仕事は、移民立国の歴史的決断を政府にお願いすることである。この大詰めの仕事は多くの人々の協力を得なければならない。国民の多数が移民を歓迎する世論を形成し、国民が移民開国を政治に迫る形で——つまり国民主導の民主的な方法で移民革命を成し遂げたいと思っている。

移民国家の創建のような国家的大事業は、幕末の吉田松陰、高杉晋作、坂本龍馬らのごとき、20代の志士が決起しないと成功しない。

今こそ平成の若き侍たちが移民国家の樹立のため行動を起こす時だ。いつの世も歴史を動かすのは決まって若い人たちだ。高い志と行動力のある若い精鋭たちが新国家建設の主演を演じ、政策通の私が後方からそれを支えるのがあるべき姿だ。

私は移民政策を立案した責任者として象徴的な役割をはたす。移民革命の理論的指導者の責任を逃げるわけではない。仕事の力点を理論形成から啓発活動に移すということである。私が一歩引くことによって、坂中ドクトリンに共感する新進気鋭と各界の叡智が集結し、大構想の実現が早まることを期待する。

古希を迎え、天職を授かった晩年をどのように生きるかを思うようになった。身を引く時を誤ってはならないと心に刻み、移民革命の志を引き継ぐ若者の育成につとめる。

移民国家の建設が政治課題に急浮上した今、移民革命の指導者には的確な情勢判断と果敢な行動が求められる。老骨にむち打って移民国家への道をつくるため全力をあげる。それを速やかに実現し、できるだけ早く第一線から引退し、世界に開かれた心を持つ少年少女たちに日本の未来を託したい。

移民国家を背負う大黒柱にバトンをつなぐのが私の使命である。そのことについてはあまり心配していない。世界各国の歴史が物語るように、民族の存亡がかかる時代には世直しに立ち上がる人物が輩出し、その中から時代の要請にこたえる国民的リーダーが出現するものである。平成の日本にも救国の立役者が必ずや現れるだろう。

2015年6月22日、移民を求める世論の高まりに呼応して、「移民政策をすすめる会」（野田一夫会長、坂中英徳政策アドバイザー）が発足した。野田一夫日本総合研究所会長を長とする20名の精鋭が、移民賛成の国民の声を結集し、移民立国の決断を内閣総理大臣にお願いするため立ち上がった。

この会の発会の日、野田一夫先生を囲んでわれわれは何をなすべきかについて自由討論を行った。老と壮からなる平成の侍が一丸となって国事に奔走する態勢が整った。私は移民政策の専門家の立場から野田先生を全面的に支える決意を表明した。

人口崩壊と社会消滅の危機が迫る祖国を救うべく集まった憂国の士が、移民国家への道は最終局面に

入ったとの認識に立って、産業界、教育界、地方公共団体など諸団体の移民賛成の声を吸い上げ、掘り起こし、盛り上げ、それを政治に伝える役割をはたす。

移民政策をすすめる会の初会合では、5時間にわたって議論が戦わされた。この日88歳の誕生日を迎えられた野田一夫会長は最後まで熱い議論に参加され、大所高所から私たちを導き、私たちに檄を飛ばされた。日本を代表する知識人の警咳に接した若い人たちはこの日を忘れないであろう。移民革命前夜の熱気があふれるなか、ひとり私は天の時と人の和を得た喜びにひたった。

「2015年6月22日」は、移民革命の志士たちが決起した日として日本の歴史に刻まれるだろう。